

社会福祉法人グリーンローズ

「ことば」の教室
オリブ園
インクル

新しい年が始まりました!

・柴田貞雄先生より

・卒園児の活躍!

イラスト すごい!! 国際大会へ



言語聴覚士(ST)への思い

元 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 学院長 柴田貞雄

人類がある限り言語聴覚士(ST)は不可欠だと考えています。人として生きていくためには、栄養を取り、酸素を吸うという生命機能と、思考し他と意思伝達し合って社会で生きるための言語機能は必須の根元的なものです。これらの不具合の回復改善を図り、人間としての幸せを支援する専門職こそがSTであるからです。医療・福祉・教育の分野で活躍しています。幸いなことに今やわが国ではSTの養成・普及の体制は確立し、本来の目的を果たしつつあります。しかし、ここに至るには約50年を要しました。その道程を社会福祉法人グリーンローズとのかかわりにも触れながら回顧したいと思います。

言語聴覚士の必要性を国が認識し、即応的とも言える養成が試みられたのは昭和46年(1971年)でした。そして紆余曲折がありました。平成9年(1997年)に医療専門職としての国家資格制度が成立し、養成教育と全国への普及が本格的に始まりました。私は順天堂大学医学部を出て耳鼻咽喉科医を目指していましたが、移籍して東大にいた昭和39年(1964年)、切替一郎教授の勧めもあって当時、聴覚言語障害の実践、教育・研究に世界でもっとも発達していたアメリカはカンザスのWichita州立大学の大学院で聴覚言語障害学を学ぶことになりました。この大学院は、聴覚言語障害を持つ人々へ総合的なサービスを行い、障害者とその家族の生活空間も含む広大なキャンパスを持つ全米有数の音声言語障害臨床・教育・研究施設に設置され、Martin F Palmer(パーマー)博士が主宰していました。博士はアメリカの聴覚言語協会の創始者の一人で、脳性まひ児を救いたい一心でこの施設を開かれたと伺っています。彼はWHOから派遣され日本政府に聴覚言語障害対策の推進を強く勧告しSTの必要性を説かれました。そればかりではありません。私も含めて多くの日本人を、私費を投じて留学生として招き日本での始まりの基礎となる人材を育成して下さいました。ひょっとしたら日本のSTの生みの親はパーマー博士だと言えるかもしれません。私はかの地で多くのことを学びましたが、特に印象付けられたのは障害児・者の家族は勿論、一般市民の誰もがSTを知っており、信頼しその存在を高らかに語り、誇ることでした。また、後で判ったことですが、実はルーテルの創始者(後に社会福祉法人グリーンローズも同一敷地内に創設)片桐格先生と私は博士を介して既にご縁がありました。

そして帰国した私は国立聴力言語障害センターに赴任し言語障害の臨床と、同時に聴能言語専門職養成の準備に参加し、昭和46年(1971年)、同センターに本邦初のST養成所が開校され教育を担当しました。言語障害の外来や相談、さらに専門職教育という未知の仕事にウエイトが移り、耳鼻咽喉科診療が縁遠くなって若干、淋しく複雑な思いをしました。しかし、障害は疾病に由来し医療・医学の責任分野だから医師としてこの領域の発展に尽くす責務があると考え直し、アメリカで見た障害児・者へのサービスの充実ぶりを是非とも日本で実現したいと思い定めました。アメリカの教育内容に負けないカリキュラム作りを意気込みました。開校すると全国から未来を拓く気概に溢れた、大学を卒業した若者が多く参集し懸命に学び、全国各地に展開して必死に実践し、地の塩となって今日の「教育・サービス体制」確立の核となりました。彼らが先陣を切ってSTの周知という課題を見事にクリアしてくれました。養成の目的は、高度の専門知識・技術を習得したSTを全国くまなく普及させることですが、それを保証するにはSTの国家資格化が不可欠でした。「養成・教育」と「資格制度推進運動」を並行して行う必死の思いの年月でした。そして遂に平成9年法制化が実現し、ST教育・臨床サービス展開の基盤ができたのです。真の専門職の誕生です。大袈裟ですが生きている間に夢が叶う幸運を感謝しました。同時に、志のために奔走敢闘した彼らパイオニアSTたちに改めて深い敬意と感謝を抱きました。

片桐格先生と初めてお会いしたのは養成を始めた直後の昭和46~7年だったと思います。先生は子供の発達促進・支援に全生涯をかけて事業を行いたい、発達のkeyになるのは言語の発達とコミュニケーション態度の育成であると、熱心にトツツと、いつ果てるかもしれない調子で訴えられました。ついてはグリーンローズに専門職員を導入したいので協力して欲しい、ということだったと記憶しています。驚きました。言語の本質的な重要性を指摘されたことと、そのヒントをパーマー博士から直接えられ、それを天の啓示として受け止められたと伺ったからです。言語への深い理解を示されたことは喜びと感動でした。どんなきっかけでアメリカに単身渡り、いつ博士にお会いになって、どんな話し合いが進行したのだろうかなど奇跡的にも思えました。片桐先生の渡米行脚は昭和39年(1964年)だったと後で知りました。私が留学で現地に赴く直前だったのです。そんなことで言語臨床の普及・周知を熱望していたので、渡りに船と喜び勇んで協力させて頂きました。多くの逸材が秋田から養成所に来て、学んで、帰ってくれました。片桐勝也君、貞子さん、後藤進君、佐々木明美さんなどです。

実は私たちがグリーンローズから大変貴重な恩恵を授かりました。沢山の養成所の学生たちが臨床実習で指導を受け、感銘の面持ちで帰ってきました。さらに圧巻は金田昭三先生の養成所における渾身の集中講義です。金田先生の底流にあるこどもへの普遍の愛と慈しみを基調とした実践技術・知識の講義は学生たちの魂を揺さぶり続けました。私は今も、多くのSTたちの中に、ご指導の薫陶を感じ、ST精神の伝統として受け継がれていることにこの上ない喜びと感謝を禁じえません。ST養成・普及の意義とやりがいを確認できたのは新屋を訪れグリーンローズを目にした時からです。グリーンローズは日本で一番、信頼のできる「こどもの施設」だと思ってきました。相談を受けた親御さんに秋田に行くことをためらわずに薦めました。

子供と親を取り巻く環境は、政治・経済、医療・福祉制度、人々の意識など、世の中はさまざまに変化します。どちらかというところ、厳しさが年々増している印象があります。そんな中で創設以来、何代にも亘って、雨ニモケズ風ニモケズに、頑固・律義にこども達への思いを貫いた尊さ、人々の苦悩や苦しみを“逃げず”に受け止めてきた”愛の高貴さはこのグリーンローズの精神あるいは魂の源流なのでしょう。グリーンローズの長い発展史、業績、真髓を見てこれたのは大変幸せでした。地域の人に信頼され、支えられ、誇りにされる施設の全ての関係者に心からの敬意と感謝を捧げたいと思います。この園の永遠の発展を念願します。有難うございました。

蛇足ですが、私はST界に没頭できて楽しく充実したい人生だったと、つくづくしみじみ思う日々を過ごしています。

この寄稿は平成27年度社会福祉法人グリーンローズ事業報告に寄稿されたものです。柴田貞雄先生は昭和46年(1971年)に、本邦初のST養成施設である国立聴力言語障害センター附属聴能言語専門職員養成所の教育を主宰し、多くのSTを育て上げました。その功績は、語る事ができない程大きいと思います。私たち(社会福祉法人ST職員)の偉大な恩師ともいえます。(後藤)

2017～2018年度
MD332平和ポスターコンテスト選考会

最優秀賞 332-F地区 須田 千尋さん(13歳)大仙市立仙北中学校 2年
須田千尋さんはオリブ園の卒園生です。



国際ライオンズクラブが世界中の子どもから作品を募集する平和ポスターコンテストで、秋田県大仙市の仙北中学校2年の須田千尋さんが、東北地区の最優秀賞に選ばれた。本県の同賞受賞者は3人目。日本の代表作品8点のうちの一つとして来月、国際審査を受ける。コンテストは、子どもたちに平和の尊さについて考えてもらおうと毎年行っており30回目。今年のテーマは「平和の未来」で、11～13歳を対象に募集した。東北6県からは計4616点の応募があった。造形部に所属している須田さんは昨年に続き応募。平和の象徴とされる白いハトが光を放ちながら飛び、闇に包まれた世界が明るくなっていく様子を描いた。部活動の時間以外にも自宅で制作に励み、半月ほどで完成させたという。今月16日に仙北ライオンズクラブを通じて表彰状が贈られた。須田さんは「テロや戦争に巻き込まれた経験があるわけでもなく、(紛争地の子どもに比べ)平和への意識が疎いのかもしれないが、作品に取り組むことで平和の意味やよりよい未来をつくる方法を改めて考えさせられた」と話した。

公益財団法人中央競馬 馬主 社会福祉財団よりオーディオメーター(右写真)の寄贈を受けました。平成28年度に頂いたのですが、プレイやCORにつなぐコードの作成が遅れ、皆様への紹介が遅れました。子どもたちの聴力の測定、聴覚管理に大きな役割をしたいと思います。ありがとうございました。



何かありましたら誰にでも連絡・相談

📞オリブ園 018-828-7750

E-mail olive@kodomo-sekai.com

ホームページ <http://www.kodomo-sekai.jp>

📞放課後等ディサービス・インクル2 018-827-7411